



今年度作成した「とやま型学力向上プログラム(Ⅲ期)の視点を踏まえた授業づくりのポイント」リーフレットや、「授業づくりシート」の活用例を紹介し、個人や校内での研修等に生かし、授業改善に取り組みましょう。

「授業づくりのポイント」リーフレット、「授業づくりシート」(富山県教員応援サイト)



子供の問題発見・解決能力の育成を目指して ~とやま型学力向上プログラム(Ⅲ期)の推進に向けて~

どのような子供の姿を目指して授業づくりに取り組みればよいか、これまでの授業を見つめ直し、学習者中心の授業づくりに向けた取組を進めていきましょう。

とやま型学力向上プログラム(Ⅲ期)の視点を踏まえた授業づくりのポイント

とやま型学力向上プログラム(Ⅲ期) R5~

とやま型学力向上プログラム(Ⅲ期)では、「問題発見・解決能力」の育成を目指し、「子供の問題(課題)意識を高める」「子供が自己調整しながら学習を進める」を基に授業改善に取り組みましょう。

確かな学力

問題発見・解決能力の育成

【授業改善の視点】

視点1 子供の問題(課題)意識を高める

<教師の手立て(例)>

- 導入での事象の提示や学習環境の工夫
- 既習事項との違いを確認する場の工夫 等

視点2 子供が自己調整しながら学習を進めることができるようにする

※自己調整: 課題解決の過程で、自分の学習状況を把握し他の子供と話し合うなどして、方向性を見直し、必要な内容等について考えたりすること 等

<教師の手立て(例)>

- 活動の見通しをもたせる工夫
- 情報を収集・選択し、考えをもたせる工夫
- 一人一人の問題解決に生きる対話の工夫
- 考えを分かりやすくまとめ、表現させる工夫
- 自己の活動を振り返らせたり、身に付いたことを自覚させたりする場の工夫 等

・学びに向かう力の高まり

・自己肯定感の向上

家庭学習へのつながり

- もっと考えたい、あきらめないでよかった。また、がんばろう。
- もう1回やってみよう。難しいかもしれないけれど、挑戦しよう。

<子供の姿の例>

問題発見・解決能力を身に付けていく子供の姿の例

問題発見・解決能力を身に付けていく子供の姿は、必ずしも以下の順にみられるわけではありません。学習の状況に応じて繰り返されたり、行き来したりすることも考えられます。

興味・関心をもつ

- 心が動く(感動、驚き等)
- 疑問を感じる

課題を見いだす

- 気付く
- ずれを感じる
- 追究したくなる問いまで高める

課題解決への見通しをもつ

- 目当てをもつ
- ゴールをイメージする
- 進め方を考える

考え、判断し、解決していく

- 自分事として捉える
- 比較、関連付ける
- 試行錯誤し、自らの学習を深める
- 考えをまとめ、伝え合う

まとめと振り返りをする

- 課題に対する学習内容をまとめる
- 学び方を振り返る
- 身に付いた力に気付く
- 新たな気付き、見直しをもつ

<教師の具体的な手立ての例>

目指す子供の姿に向けて単元を構想する

- 子供に身に付けさせたい資質・能力の確認
- 子供の実態、教師の願い、教材の特性を意識した全体計画の作成
- 指導事項を踏まえた評価場面の位置付け

子供が課題をもつための場や環境を設定する

- 引き出した問いや問いから、子供自らが追究したくなる課題づくりへの後押し
- 学習への期待感を高める事象の提示や学習環境づくり

単元を通して、子供の問題(課題)解決の意識の持続・向上を図る

- 授業で扱う材料や用具等の工夫、場所や時間の柔軟な設定
- 子供のつまずきを想定した複数の手立ての準備
- 既習事項との違いに気付かせる発問や板書計画づくり

子供が主体となって学び進めるための場や機会を設ける

- 子供が追究に応じて選択できる、教材、方法、進め方等の工夫
- 子供が必要なときに、必要な相手と対話したり、協働したりできる場面の設定
- 収集した情報を整理・分析し、まとめ・表現する機会の充実

子供一人一人の学びの状況を把握する

- 問題解決の見通しをもっているかの見取りと声かけ
- 端末やノート等での子供の考えの確認
- 子供が付けた力に向かっているかの状況確認

子供が成果や課題を自覚するための視点や場を設ける

- 振り返る観点・視点の明確化
- 子供が次の活動の見直しをもつための振り返りの活用

各学校による主体的な学力向上の取組の推進(Ⅱ期) PDCAサイクル H25~R4

1期を根拠に置く

学力の向上と人間関係づくりを一体的に進める「学び合い」(Ⅰ期) H20~H24

実感を伴った理解につながる「体験」の重視

<授業改善の視点>

○ねらいを明確にした授業の構想 ○目的を明確にした活動 ○終末における学習成果の確認

学びの土台

幼児期から育む非認知能力の例

自分を高める力
意欲、好奇心、創造性等

自分と向き合う力
自己肯定感、自制心、やりとりの力

他者と関わる力
コミュニケーション力、協調性、思いやり等

<非認知能力の例>

とやま型学力向上プログラム(Ⅲ期)の視点を踏まえた授業づくりシート

※□(チェック欄)を活用して、自分の授業を振り返り、自己理解を深めましょう。
※子供の姿を思い浮かべながら、教師の願いを明確にし、手立てを考えましょう。授業後に、自分の授業を評価し、改善を図りましょう。
※Memo欄には、<例>を参考に授業づくりのアイデアや授業で行った手立てを書きためるなどすることで、自分の記録として使うこともできます。

目指す子供の姿に向けて単元を構想する

- 子供に身に付けさせたい資質・能力の確認
- 子供の実態、教師の願い、教材の特性を意識した全体計画の作成
- 指導事項を踏まえた評価場面の位置付け

単元を通して、子供の問題(課題)解決の意識の持続・向上を図る

- 授業で扱う材料や用具等の工夫、場所や時間の柔軟な設定
- 子供のつまずきを想定した複数の手立ての準備
- 既習事項との違いに気付かせる発問や板書計画づくり

子供一人一人の学びの状況を把握する

- 問題解決の見通しをもっているかの見取りと声かけ
- 端末やノート等での子供の考えの確認
- 子供が付けた力に向かっているかの状況確認

チェック欄: 授業を振り返る際に□するなど、ご活用ください。

Memo欄: 考えたことや聞いたこと等自由に書き込むことができます。

教師は、子供の姿を見取り、授業改善の視点1~2を基に具体的な手立てを工夫

<非認知能力について知りたい A 教諭>

なぜ、非認知能力を高めることが大事だと言われるのでしょうか。

<非認知能力の例>にあるように、非認知能力は学びの土台となるもので、非認知能力と認知能力は互いに影響を与え合いながら、一体となって育ちます。そのため、例えば授業では、子供が「なぜだろう」「分かるようになりたい」と感情を動かすための仕掛けを考えることが大切です。粘り強く問題に取り組むことができたという経験は、さらに、子供の非認知能力を高めます。

<子供が主体となる授業を实践したい B 教諭>

子供がやりたいことを自己決定し、自ら学習に取り組んでいく姿に高まるには、どのような手立てが効果的でしょうか。

<子供の姿の例> <教師の具体的な手立ての例>を参考に、子供の実態や教師の願い、教材の特性を踏まえ、目指す子供の姿に向けて単元を構想しましょう。そして、子供のつまずきを想定した複数の手立ての準備や、学びの状況の見取りを基にした的確な声かけ等、自ら学びを進めていけるよう支援することが大切です。

<授業改善を図りたい C 教諭>

「授業改善」をするには何から始めたらよいでしょうか。

授業づくりシート **チェック欄** を活用し、自分の授業を客観的に捉えてみるとよいと思います。まずは、自分が意識していなかったところを見つけてみましょう。自分自身の「強み」や「弱み」を自覚し、どのようにしていくかを明らかにすることで授業改善へとつながっていきます。

<授業を参観するときの視点をもちたい D 教諭>

授業を参観する際に、どんなところを見たらよいでしょうか。参観者がノートに記録する姿を見ますが、どんなことをメモしているのでしょうか。

子供の姿(発言、表情、行動等)を見取り、それらが何に起因するのか考えてみるとよいと思います。授業づくりシートを参考に、**Memo欄**に教師の手立て、考えたこと等を書きためていけば、アイデアが蓄積され、授業づくりに生かすことができます。